

# 1600年代後半における剣術心法論に関する一考察： 金子夢幻と『梅華集』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード: 作成者: 長尾, 進 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/5160">http://hdl.handle.net/10291/5160</a>

## 1600年代後半における剣術心法論に

### 関する一考察：

### 金子夢幻と『梅華集』

長 尾 進

#### I 剣術心法論のはじまり（とくに禅との関連において）

室町期には、諸芸道において、仏・儒・老荘などの思想的影響を受けて、その内面的深化がはかられるようになった。とりわけ、中世における時代的精神ともいえる禅と芸道との関係は深い。連歌においては心敬の、能においては世阿弥の芸談に禅の影響がみえ、茶道においては村田珠光が禅味を加えて侘茶を創始し、千利休がこれを完成させた。芸道において到達するところの奥旨は、自得・自証すべきものであり、その修行方法が、禅的思想・精神と合致するところが多い故であろう。

武術においても、室町末期頃から、それまで「兵法」（へいほう、ひょうほう）の語によって概括されていた実戦本意の総合的な武技が、それぞれの武芸に独立し、禅や儒学、老荘の古則・古語などをもってこれを説くものがでてきた<sup>1)</sup>。

剣術の伝授・指導にはじめて禅語を導入したのは、新陰流の祖・上泉伊勢守秀綱（のち武蔵守信綱）といわれる。上泉は伝書の作成にあたって、かれが修した「陰流」とは別に、自身で創案工夫した部分については、『碧巖録』のなかから抽出した「一刀（一ツツ）兩段」などの禅語を当てた。これは、それまでの兵法伝書における技名が、単なる隠語や符牒に過ぎなかったのに対し、自ら

の編み出した剣術の性格や特徴を禅語によって象徴的に示そうとしたり<sup>2)</sup>、かつ、ある種の文化性を具有させようと意図したものであった。

この上泉から印可を受けた柳生宗厳（石舟斎）は、その遺した伝書のなかで、多様な心理的表現や音楽的表現とともに、『景德伝燈録』や『槐安国語』中の古則を用いた<sup>3)</sup>。

しかし、この頃までの武術家・剣術家の伝書中にみられるこれらの古則・古語は、「かれらが剣術の修行により体験的に自得したものと、禅理その他とをどのように結びつけるかということについての苦心の跡が見られ、そのことはこれらの書の理解を困難にしている面もある」ということが、源了圓氏<sup>4)</sup>などによって指摘されている。

宗厳の子で、秀忠・家光の2代にわたり徳川将軍家兵法師範を勤めた柳生宗矩は、剣術の実技面のみではなくその根底にある心法上・理論上の問題についての家光の下問に筆答をする必要と、将軍家師範として他流に優れた伝書を遺す必要とに迫られ、『兵法家伝書』（1632）を著した。

『徳川実記・大猷院（家光）殿御実記巻六十四』によれば、

宗矩若かりしとき禅僧にちなみ、悟道の要旨を聞いて頓に道にすすみたりと覚えし事の候ひしと申ければ、さらば其僧めせとて仰られしに、濟家（臨濟宗）の一派宗峰の遠孫沢庵宗彭<sup>そうほう</sup>を薦挙したり。やがて沢庵は関東にめされ、宗矩、沢庵と共に一家の書（兵法家伝書）を撰て献り、禅をかりて術をさとす。〔括弧内、及び、ふりがな筆者。以下同じ〕

とある。また、宗矩の子・三厳（十兵衛）によれば、

（宗矩は）善知識（仏道の教導者）にまみへ、数々の古則話頭を参じ、一々皆その旨を得ては、是をわが兵法の機前にあて、心の転所とす。故に禅話ども数句を注し、是を兵法の道に引なぞらへたる事多。（『昔飛術といふ者あり』<sup>5)</sup>）

という。

これらにしたがえば、宗矩は若年の頃から禅僧たちと親しく交わった経験

(参禅経験もある)から、禅の要諦を剣術に当てはめることによって、自らの兵法の心の拠りどころとした。であるからこそ、私淑する沢庵に呈示された『不動智神妙録』や『太阿記』を基として、流祖上泉や父宗厳より受け継いだ剣術の奥旨と、自らが剣術修行で得た経験とを禅の教えに照らし合わせ、『兵法家伝書』を著し、献上したのである。

『兵法家伝書』は、禅語のみならず、『大学』や『老子』を援用・引用して書かれており、心法論的記述も多い。先述したように、徳川將軍家師範として、単なる剣術の技術書としてではなく、それまでの剣術伝書よりもさらにアカデミックな色彩をもつ剣術書を作ろうとした宗矩の意図もうかがえる。但し、『兵法家伝書』に説かれる心法論は、あくまで剣術の実際の技法に即したかたちで記述されていることは、おさえておく必要がある。

このうち、島原の乱(1637~38)や慶安の変(由井正雪の乱。1651)を経て、本格的な泰平の世を迎える1600年代後半からは、より心法論に傾斜した剣術流派や剣術論が出現するようになる。

## II 心法重視の剣術論の登場

1600年代後半の心法重視の剣術流派の代表的なものとして、針谷夕雲<sup>はりがやせきうん</sup>を祖とする無住心剣術<sup>むじゅうしんけんじゅつ</sup>があげられよう。

無住心剣術2代小出切一雲の著した『夕雲流剣術書』<sup>6)</sup>(1686頃)によれば、夕雲は、上泉秀綱に印可を受けた小笠原玄信<sup>(ママ)</sup>(源信斎)に新陰流を学び、その門下中の「二人三人ノ上手」といわれたが、これにあきたらず禅を嗜み、諸禅師に示諭を受けた。

とくに東福寺の虎白和尚<sup>(ママ)</sup>(東福寺第240世・虎伯大宣)に帰依し、12~13の古則公案を打破したという。そして、禅学の意味より窺えば、元祖上泉をはじめ、他流や師源信の奥義「八寸ノ延カネ」なども、皆ことごとく「妄想虚事」の類であり、「人生天理当然ノ性ノ受用」ではないと自覚するに至っ

た。また、これらの多くは「畜生心」であり、その「畜生心」を離れ、「所作」(つくられたもの)を捨て、「自然本然ノ受用ノ中ヨリ<sup>(ママ)</sup>勝理ノ具ハル事」を自得しようとして研鑽した。

そこで、以前に修した諸流の教えを捨て、自己の禅修行によって得た境地から剣術を「一法」に凝縮して、「一生ノ受用」とした。はじめは流名もなかったが、「強テ名ツケバ、無住心剣術ト云ハンカ」と虎伯が言ったところから、これを流名とした。

本稿でとりあげる法心流の祖・金子夢幻(金子範任。通称、彌次左衛門。夢幻は号)は、上記『夕雲流剣術書』の著者小出切一雲が、自己の剣術に対する考えと「主意殆符節ヲ合ス如シ。同気相求ル之故ヲ以テ、黙契心通更ニ山川ヲ隔ズ」(『梅華集』巻末、一雲跋文)と評した剣術家である。また、その唯一の著作である『梅華集』(1689頃)は、同跋文によれば、「公(夢幻)悲愍之余、書一卷ヲ作り、梅花集ト名ツケ弟子ニ示サント欲ス。剣術ノ書タリト雖モ、聊カモ勝負ノ枝葉ヲ説カズ。字々句々唯天真之妙、大極之理、各々固ヨリ心性之論ノミ也」といわれるほど、徹底して技法論を廃し、心法を説いた剣術書である。

金子夢幻については、後年、天真伝一刀流兵法を教導した白井亨(義謙)の著『兵法未知志留辺・卷之上』(1833)に、「昔年針ヶ谷夕雲、<sup>(ママ)</sup>小田切一雲、<sup>(ママ)</sup>金子夢幻、山内蓮心等の遺書あり。各兵法に於て微妙を得て其の所得を述べたるは、…中略…、右四人各名人なりと云へども…」(下線筆者)という一文にその名があることはこれまでも知られていたが、詳しいことはそれほど明らかにされてこなかった。また、諸書において伝えられる夢幻の伝記にも、誤りが散見される。

そこで本論文では、金子夢幻および法心流の経歴・伝系などについて再調査を行いこれを明らかにし、また、唯一の伝書である『梅華集』の記述内容、および夢幻の剣術論をみることによって、1600年代後半における剣術心法論の特徴の一端を明らかにしようとするものである。

### Ⅲ 金子夢幻について

#### 1. 金子夢幻の伝記

これまでは、前出『兵法未知志留辺・卷之上』中の金子夢幻についての割注に、「高田侯の臣、弥次右衛門(マツ)と云、法心流の祖なり」とあることから、諸書において越後高田藩士とされてきた（『日本剣道史』<sup>7)</sup>、『増補大改訂武芸流派大事典』<sup>8)</sup>など）。しかし、夢幻を寛文11年（1671）に召抱えた榊原政倫とよは越後村上藩主であり、また榊原家が高田藩主となるのは夢幻が没したのちの寛保元年（1741）であることから、夢幻を「高田藩士」とすることには疑問が呈されている（間島勲氏『全国諸藩剣豪人名事典』<sup>9)</sup>）。

この点については、1939年に石塚寿夫氏から当時の高田市立図書館長・安藤恵順氏に依頼しての調査がなされており、金子夢幻は村上在城時代の榊原家に召抱えられたことが指摘されていた（富永半次郎『剣道に於ける道』<sup>10)</sup>所収）。この安藤氏の調査と、筆者が上越市立高田図書館（旧高田市立図書館）において行った調査を合わせて、このことについて改めて整理すると次のようになる。

天正18年（1590）から慶応2年（1866）に至るまでの榊原家の文武教育の概略について記した『旧高田藩文武教育沿革概略』（上越市立高田図書館蔵）には、「金子範任小傳」があるが、それによると、金子範任（通称弥次右衛門(マツ)）は、寛永13年（1636）江都（江戸）の生まれで、幕府麾下の士（旗本）大久保越中守（忠辰とよ）の臣であった。寛文11年（1671）に、榊原政倫に仕えて刀術師範役を務め、宝永元年（1704）、榊原家が姫路に転封になる同年に、越後村上において享年68歳で卒している。

また、榊原政倫の事蹟を記した『嗣封録卷之八 政倫公』（上越市立高田図書館蔵）のなかの「村上御代被マツ召抱候面々」にも、「金子弥次右衛門範任、後号マツ夢幻、百五十石十騎、寛文十一年」とある。

これらからすると、金子範任（夢幻）は、越後村上藩主榊原政倫に召抱えられ、村上において亡くなった人物であり、高田藩士というよりも、安藤氏の指摘するように「榊原家村上在城時代の臣」という方が正確である。

## 2. 榊原家仕官の経緯

「金子範任小傳」にあるように、金子範任（夢幻）ははじめ旗本・大久保越中守忠辰の臣であった。『寛政重修諸家譜第11』によれば、大久保忠辰は寛文3年（1663）に徳川綱吉に附いて上州館林の城代となり、3000石の新地を賜った。しかし、寛文5年（1665）に所存を上書したことで、綱吉からも忠辰のことを「つねに我意に任せ、蔑如しまいらす」と將軍家綱に伝わったことから、同年10月に「譜第たるをもつて<sup>(ママ)</sup>重任を命ぜらるゝのところ、その覚悟よろしからず」として、新恩の地3000石を没収され、松平讃岐守頼重に預けられた。

範任にしてみれば、30歳になろうとする頃に突然主家を失ったことになる。榊原家に抱えられるまでの6年間は、浪人生活を余儀なくされたであろう。寛文11年（1671）、範任は当時15万石の村上藩（譜代・榊原家）に、150石の待遇で迎えられる。これは、藩主政倫が当時数え7歳の幼君であったことから考えると、榊原家の家臣たちによって仕官が進められたものと思われる。

「金子範任小傳」には、「(主君・大久保忠辰が)性武術ヲ好ミ、當時ノ達人柳生但馬守、真木新平、木下淡路守(備中足守藩主、淡路流槍術祖)、加藤遠江守(出羽守、伊予大洲藩主、加藤家伝流槍術祖)等ト友トシ善シ。故ヲ以テ範任名人ト<sup>シテ</sup>断打スルヲ得テ終ニ其術ニ練達ス」とあるが、このような範任自身の武術の練達と、大久保家出仕時代に培った武術関係の人脈が、榊原家仕官の手助けとなったのであろう。

### 3. 村上における金子夢幻

#### (1) 禄高・身分について

前述のように、金子範任は寛文11年（1671）に榊原家に召抱えられ、「百五十石、十騎」であったという（「村上御代被召抱候面々」『嗣封録卷之八政倫公』所収）。

ところが『嗣封録卷之八 政倫公』にある「天和二年（1682）ヨリ貞享元年（1684）迄三ヶ年之分限帳」によれば、「貳百石 金子弥次<sup>(マツ)</sup>右衛門」とある。また、村上<sup>(マツ)</sup>の郷土史家・故大滝雪邨氏によれば、金子弥次<sup>(マツ)</sup>右衛門は「元禄十三年（1700）九月榊原家分限帳によると貳百石取りの範士」とであるという（「村上藩武芸史の研究」、『郷土村上』第13号、1974年）。

この他にも、『新潟県史（資料編8近世3下越編）』および『郷土村上第19号』（1975年）に所収されている山貝家所蔵の榊原家分限帳には、「貳百石 金子弥次左衛門」とある。これらからすると、当初150石で抱えられた金子範任は、のちに200石に加増されたようである。

#### (2) 居所について

村上での居所について大滝氏は、「村上市大字本町にて通称与力町北寄り（現村上市杉原）にあった」（大滝氏前掲論考）と推定されている。

『越後國岩船郡村上榊原家御在城御家中御屋敷付（写）』（1702年、上越市立高田図書館蔵）によれば、金子弥次左衛門は、「金子平次左衛門」という人物（息子か）とともに、城下「北新町壱番町」に住んでいる。

また、榊原家在城中の『越後國岩船郡村上之圖（写）』（同図書館蔵）にある金子平次<sup>(マツ)</sup>左衛門の屋敷、および『元禄年間の城下絵図（写）』（村上市郷土資料館蔵）にある金子平次<sup>(マツ)</sup>左衛門の屋敷を、現在の村上市の地図にトレースすると、大滝氏の指摘通り、現村上市杉原あたりになる。

#### (3) 墓所について

「金子範任小傳」には、「宝永元申年（1704）、越後國村上ニ卒ス。享年六十八歳」とのみある。筆者は、2000年8月に村上に赴き、村上市郷土資料

館、浄土宗光徳寺（榊原時代は曹洞宗瑞峰寺で、榊原時代の無縁仏が葬られている）、臨済宗安泰寺（村上唯一の臨済宗寺）、浄土宗浄念寺（榊原時代は泰叟寺と称し、榊原家の菩提寺であった）の各所において金子範任の墓所を尋ねたが、見つけることはできなかった。墓所については、引き続き調査したいと考えている。

#### 4. 金子夢幻の剣術修行と、その伝系

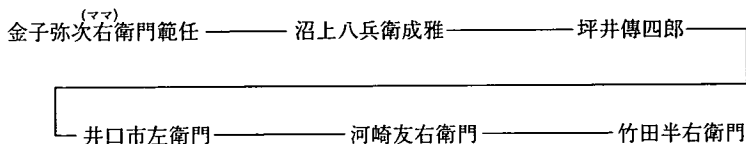
『増補大改訂武芸流派大事典』などを始めとして諸書において金子範任は、「榊原家の藩士金子範直に観流を学び、諸流を看破して一流を開いた」（下線筆者）とされる。

しかし、観流は、範任とはほぼ同時期に榊原家の刀術師範役を務めた齋藤常實（團右衛門）が創始した流派であり、常實から7代のちの観流師範役である金子範直に学んだとすることには疑念がもたれている（間島氏前掲書）。

前述したように「金子範任小傳」には、範任が「当時ノ達人」である柳生但馬守（宗矩か）や木下淡路守（淡路流槍術祖）、加藤出羽守（加藤家伝流槍術祖）らと「<sup>しだ</sup>断打」することができたので剣術に練達したとある。柳生宗矩が没したのは正保3年（1646）であるので、当時10歳前後の金子範任が宗矩と交流があったとは普通は考えにくい。『梅華集』巻末の小出切一雲跋文に、「<sup>ここ</sup>粵に金子氏之賢士有り。髻童（垂髪ちりかみの幼時）より兵法を嗜み」とあることから考えると、幼少年時代に宗矩から直接教を受けた可能性も否定できない。

また、「良治、法成寺次郎左衛門（初代または二代近江守正弘か）ニ、三尺二寸ノ太刀ヲ鍛錬セシメ、大鑄ヲ打ち、<sup>せまし</sup>隻手（片手）ニテ常ニ揮ルコト六七七度。其熟達此ノ如シ」ともあり、これらからして範任の武術は、柳生流をはじめ諸流の名人と交わる中で、自ら作り上げてきたものといえよう。

『旧高田藩文武教育沿革概略』所収の「<sup>(ママ)</sup>放心流傳統」をみると、伝系は、



となっている。これら道統を継いだ者たちの詳細は判らないが、いずれにしても範任を含め6代で途絶えており、範任在任中は「一藩門ニ入ル者多シ」（「金子範任小傳」）という盛況であったが、後世には伝わらなかったようである。

#### Ⅳ 『梅華集』

##### 1. 『梅華集』の成立年・執筆経緯・写本・構成

「金子範任小傳」には、範任が「梅花集一卷ヲ著ス」とある。また、『旧高田藩文武教育沿革概略』巻末の歴代藩士の著作を記した「武学著書」にも、「梅花集 金子範任著」とある。管見する限りにおいて、金子範任の著作として挙げられるのは、『梅華集』1巻のみである。

##### (1) 成立年

『梅華集』の巻末にある夢幻自身の後書の日付は元禄11年（1698）であるが、その前にある小出切一雲と禅僧・雲巖（全底）の跋文がともに元禄2年（1689）であるので、おそらく『梅華集』は1689年頃の成立と思われる。

##### (2) 執筆の経緯

夢幻自身の後書によれば、『梅華集』は、夢幻が重病に罹ったおり、命ある間に自らが悟得した剣術の蘊奥を後進のために遺そうとして書き記したものである。

その後、病も平癒したので、『梅華集』に記した自らの剣術論（観）に證明を得んとして、「近代禅家之名匠、愚堂老禅（愚堂東寛くどうとうしやく寛永期の妙心寺住持）五世之児孫」であり、柳沢吉保をはじめ多くの幕閣の士も帰依した江

戸小石川・龍興寺（現在は東京都中野区在）の住持・雲巖全底<sup>11)</sup>と、いま一人は、すでに深川に隠棲していた小出切一雲を訪ね、本書を呈した。

(3) 写本について

『梅華集』の写本は、これまでに確認しうるかぎりでは、以下のものがあげられる。

① 富山県立図書館蔵写本『梅華集』

天保6年(1835)に、富山藩士吉田奥之丞有恒(天真白井流)が「白井(亨)先生ヨリ借受」て写したもの。金子範任の後書、及び、小出切一雲と臨済僧雲巖全底の跋文がある。

② 国学院大学蔵写本『梅華集』

原本は、富山県立図書館蔵写本。

③ 財全日本剣道連盟蔵写本『梅華集』

原本は、富山県立図書館蔵写本。

④ 『稀本叢刊第5巻古武道文献 梅華集』

綿谷雪編、武芸帖社、1972年。富山県立図書館蔵写本を原版とする影印本。石塚寿夫氏が、富山県立図書館の了解のもとに、綿谷雪氏編の稀本叢刊シリーズに採録したもの。

このように、全て富山県立図書館蔵写本の『梅華集』が原本である。

(4) 『梅華集』の構成

『梅華集』は、序文・本文・奥書から構成されるが、それぞれの内訳は以下の通りである。

① 序文(流名の由来を含む)

② 本文(三箇標榜、無先、先之先、後ノ先、虚実分合、水月、真偽辨論の7章)

③ 奥書(小出切一雲跋文、雲巖全底跋文、金子範任後書、吉田有恒日付署名の4部分)

## 2. 『梅華集』の内容

『梅華集』本文は、前述の7章より成るが、ここではその全てを網羅することはできないので、心法を重視した剣術論としての特徴的な部分を中心に、考察を進めたい。

### (1) 流名「法心流」の由来

『梅華集』は、

夫剣術ト云ハ見術也。正見ヲ求テ、邪見ヲ求ムベカラズ。正見ト云ハ、一切の見解無キ処、是正見解也。(原漢文体、以下同じ)

という文より始まる。剣術とは「見術」であり、「正見」(正しく本質を見極めること)を求めるべきで、「邪見」(間違った見解)を求めてはいけなし、さらに、一切の見解のないところが「正見解」であると説く。このように文頭においてすでに、仏教の八正道のひとつである「正見」の実践を、剣術の目的としている。

また、流名の由来については、

(華嚴)経ニ曰、三界唯一心・心外無別法、云云。兵法俱ニ万法之中ニ有り。故ニ、心ヲ修ル外、別ニ修スベキ道無シ。所謂、法心流ト称ス所以也。

というところから、「法心流」と称したと記している。

このことについては、「金子範任小傳」に「東海寺雲巖禅師ニ就テ禅理ヲ聞キ、益々剣道ノ妙ニ通達ス。因テ流名ヲ放心流ト号ス」とあることから、諸書において東海寺(大徳寺派)開基・沢庵宗彭が著した『不動智神妙録』中の「放心を<sup>もと</sup>む」から採ったものとされてきた。たしかに後述するように、夢幻が沢庵の影響を受けた形跡はある。

しかし、雲巖全底は前述のように妙心寺派龍興寺の住持であり、『梅華集』巻末の雲巖跋文にも「(範任)自ラ号シテ法心流ト言フ」とある。また「師(雲巖)ノ談スル所、<sup>シンゲムボウ</sup>心外無法之一句、吾剣術ニ深ク至理ニ徹ス。仰テ願クハ、師ノ許可ヲ蒙テ、之ヲ後生ニ傳ント欲」(下線筆者)したともある。こ

これらの記述にしたがえば、流名はやはり「法心流」が正しいであろう。

(2) 三箇之先

序文に続いて「三箇標榜」とあり、次のように記されている。

三箇標榜

其一

撃 前進 用無先

其二

住 合住 用先先

其三

脱 後退 用後先

また、これに続いて、

都テ九井之方ニ応ズ。九井実ニ三ニ起ル。是又自然之事也。所謂三八、

天人地之三陣ニ応ズ。三々合テ九井ト成ル。畢竟、一ヲ以テ之ヲ貫ク。

知ラザルハ有ベカラザル者也

とある。「九井之方」、すなわち「井」の字によって分割される九方は、「三」から起こり、三はまた「天人地之三陣」に対応し、三三を合して（かけて）九となる。しかしながら、究極的には「一」をもってこれを貫くのである、という。

これらのことを踏まえた上で、次に「三箇ノ先」の説明がなされる。

<無先>

三箇ノ先の第1は「無先」であり、

此先ハ無名之先ニシテ、混沌未判・寂然不動之地ニ渾雑シテ、無為之先

也。一中略一。吾身モ、未ダ出生セザル以前之田地也。分別慮知之及ベ

キ処ニ非ズ。一中略一。此田地ハ、万物ノ先ニシテ、自然之枢機也。所

謂無之先也。

という。

つまり、無先は「無名・無為の先」であり、「無名」はすなわち名づけ得

ぬもの（『老子』）、「無為」は「因縁によって生成されたものでないもの」であって、混沌として物の形が未だ現れない、静かなままの地（境地）にあることをいう。

また、「吾身モ、未ダ出生セザル以前之田地也」という部分は、禅語にいう「父母未生以前本来の面目」に通じるものであり、分別や知慮の及ばない世界（相対ではなく絶対の境地）であって、この境地にある「先」が「万物ノ先」であり、「自然ノ枢機」であるという。

ただしこの「道理」は、「大形（通り一遍）ニ修スル人ノ見ルベキ処ニ非ズ。起居ニモ寤寐（ヨレ寝ても覚めても）ニモ間断ナク、五年モ十年モ此道理ヲ得ルヲ限りニ修スル人ニアラズンバ、知り難キ処也」という。

〈先之先〉

つづいて、「先之先」について

此先ハ、<sup>(マ)</sup>大極ノ先也。已ニ大極ノ名アル処ハ、事物ノ先也。無先ヨリ一階級後タル先也。自性ノ已ニ萌ジ、動テ物ニ応ズ。赤キ色ヲ見テ唯赤キ<sup>(マ)</sup>ヲ移シ、白キ色ヲ見テ唯白キヲ移ス迄ノ心ヲ云。所謂、識智ノ先、是ヲ先ノ先ト云。此先、転ゼズシテ化スルヲ持ト云、亦着ト云。是ハ<sup>(マ)</sup>已識ノ変ジテ情ニ成タル也。赤キハ桃花、白キハ梅花ト見ル心ヲ、情ト云也。無先ヲ去コト遠シ。

と述べられている。

「先之先」は「太極の先」であるという。太極も宋学的宇宙論では、「天地・陰陽が未だ分かれぬ以前の宇宙万物の元始」ととらえられるので、その意味では、先に見た「無名・無為」と同義であるが、すでに「太極」の名がつけられているので、これは無名・無為ではなく「事物」の先であるという（この点は、「無極而太極」とする朱子の一元的捉え方とは異なる）。

また、「赤い色を見て唯赤いことを映し、白い色を見て唯白いことを映すだけ」の心であり、これがいわゆる「識智」の先であって「先乃先」であるともいう。この「識智の先」（先之先）が留まって変質するのを「持」ある

いは「着」という。これは、「識智」(識別・認識)が変質して「情」(情緒・感情)になったものであり、「赤いのは桃の花, 白いのは梅の花」とみる心をいう。これはすでに、「無先」からは程遠いものである。

さらに続けて、兵法を習う人は、大概はここにある「着」(情)をもって「先ノ先」と思ってしまいが、それは「一毫千里ノ誤」であるという。

「着」(著)は禅宗においてよく用いられる語であり、柳生新陰流でも「兵法の仏法にかなひ、禪に通ずる事多し。中に殊更著をきらひ、物ごとにとどまる事をきらふ。尤も是親切の所也」(『兵法家伝書』)、「一念のをこり、着する所、いづれも病氣也。着を去て無心の心に出る事、至々極々なり」(『月之抄』<sup>2)</sup>)とあるように、物事に執着しとどまることをさし、これを「病氣」ととらえ、この「病氣」の克服を修行の大事としている(武芸における「病氣」の克服については大保木輝雄氏の研究に詳しい<sup>13)</sup>)。

また、この「先之先」の項における論旨の展開は、沢庵の『実理学之捷徑』(和文・理気差別論)に酷似する。同書の「識」の項には、「識ト申ハ、先ツ始ノ一念ナリ。赤キ物成トモ、白キ物成トモ、チャクト見テ、赤ヨ白ヨト見付タル時ノ始ノ一念識ト申ナリ」とあり、続いて「意」の項には、「意ト申ハ、右ニ申識ニハヤ分別ノ出来タヲ意ト申也。始チャクト赤キ物ヲ見テ、赤ト計見タハ初一念識ナリ。暫見ル内ニ分別ガ生ジテ、此赤キ物ハ<sup>ツツ</sup>躑<sup>ザクロ</sup>カ柘榴ノ花ジャトワキマヘシル心ヲ意ト申候。一中略一。此意ノ心ハ、当座々々ニ付テ出来心ニテ、我身ニソナハリタル本心ヲナヤマシケガス物ナリ」とある。

つまり、沢庵のいう「識」が夢幻のいう「識智」に、「意」が「情」(着)に対応していて、ほぼ同じ文脈である。沢庵の『実理学之捷徑』は正保4年(1647)には既に刊行されており、元禄2年(1689)頃に『梅華集』を著した金子夢幻がその影響を受けたことは十分に考えられる。

〈後ノ先〉

三箇之先の最後は「後ノ先」で、

此先ハ、敵ニ対シテ、互ニ争ヒノ念ヲ生ジテ相持ル処ノ先ヲ云也。相持

テ持ザル処、是後ノ先也。持ニ似ルトイエドモ、持ザル処ヲ見ニ無物也。無物ノ先ヲ識得スルガ故ニ、後ノ先ニアリテモ自由ヲ得ル也。

とある。

「後の先」は、お互いに争いの念を持った状況での先をいうが、その状況で争いの念を実は持たないのが真実の「後の先」である。争いの念を持つに似ているが、実は持たないので「無物」(存在しないもの)という。この「無物の先」を識得すれば、後の先であっても自由を得ることができる、と説く。

このようにそれぞれの「先」についての説明がなされているが、

右三箇ノ先ヲ論ズルト云トモ、畢竟ハ無ノ先也。処ニ随テ名ヲ付替タル也。先ノ先ト云モ、後ノ先ト云モ、皆無先也。

として、時宜に応じて先の名称は「先ノ先」「後ノ先」などと使い分けるが、究極のところは皆「無ノ先」(絶対の境地)であるとする。先の「三箇標榜」でみたように、「九井之方」すなわち敵の様々な動き・反応に対して、「畢竟、一ヲ以テ之ヲ貫ク」ということと同意である。

「三箇」は、新陰流系の伝書によくみうけられる用語であるが、例えば柳生新陰流における「三ケ」は、「三ケは即ち三見也。つけ、かけ、習のかかり様、以上三也。敵の何とはたらくべきとも計り難き時、此三ケを以てさはって見る可き也。敵の心をさぐり見る也」(『兵法家伝書』)、「三ケは仕掛けて候。かかる敵か、ひく敵か、まつ敵か、是三つを見ることに候」(『拙聞集』<sup>14)</sup>)とあるように、敵と相対した時に、その敵がどのような動きをするかわからない場合に、まず敵に仕掛けてみてその心をさぐることをいう。

また、「先」も柳生新陰流では、「懸とは、立ちあふやいなや、一念にかけてきびしく切ってかかり、先の太刀をいれんとかかるを懸と云也」(『兵法家伝書』)、「根本之センの越所は、我が初一念を其まゝに仕掛、センセンと勝を云」(『月之抄』)とあるように、「立ち会うやいなや、自己の一念にかけてきびしく仕掛けること」をいい、「三ケ」にしても「先」にしても具体的で

あり、実際的である。

『五輪書』にも「三つの先といふ事」があるが、「三つの先、一つは我方より敵へかかるせん、けんの先といふ也。亦一つは敵より我方へかかる時の先、是はたいの先といふ也。又一つは我もかかり、敵もかかりあふ時の先、躰々の先といふ。是三つの先也。いづれの戦初めにも、此三つの先より外はなし」といい、先についての現象的とらえかたであり、やはり具体的・実際的である。

これらとの比較の上でみれば、夢幻の説く「三箇の先」は、多分に観念的・抽象的であるといえよう。

### (3) 事理論

「無先」の章の後段では、問答形式をとるかたちで、事理論が展開されている。

問 諸流ノ劍術ハ、事ヲ修メ、理ヲ云コト稀也。汝ガ劍術ハ、専ラ理ヲ云テ、事ヲ云コト稀也。何ゾ他流ト相<sup>モト</sup>戻ルヤ。

答 諸流ハ階級ヲ立テ枝葉ヨリ根本ニ至ントス。是、漸次之修行也。我ハ直ニ根本ヲ識得スルコトヲ要トスル也。モシ修シ得テ根本ヲ知レバ、万葉千枝其中ニアラン。是、頓機之修行也。理ノ中ニ事アルガ故也。然リトイエドモ、事ヲ捨テ理ヲトルニ非ズ。事ノ中ニ全く至理アリ。仮令、理ト云ハ人ノ心也。事ト云ハ人ノ身也。是ヲ以テ見レバ、心ノ喪亡スル者何ゾ身アラシヤ。身ノ破滅スル者ハ、心ノ住スベキ家宅ナキガ如シ。然バ、事理一如ニシテ、ニツアルニ非ズ。

(下線筆者)

とあるが、この事理に関する問答は、二面性を持っている。

「諸流は事を修め理を云うことは稀であるのに、汝の剣術は専ら理を云い、事を云うことは稀である。なぜ他流と異なるのか」という問いに対し、「諸流は、段階を設けて枝葉から根本に至ろうとする漸次の修行であるが、自分の流儀は、直接に根本を識得することを枢要とする頓機の修行である。

それは、理の中に事があるからである」として、「事」は「理」の中に含まれるとする。

その一方で、「しかしながら、事を捨てて理をとるのではない。事のなかにこそ至理がある」とし、また「理」を「心」に、「事」を「身」に対応させたうえで、「心（理）の喪亡するときには身（事）も存在しない」、「身（事）の破滅するときには心（理）の存在する場所もない」として、理と事とを対等なものとしてとらえ、「事理一如」を強調している。

これについて、

問 世間ニ、兵法ノ道理ヲ好ク知り得テ、弁舌分明ニ道理ヲ言トモ、兵法ノ事ハ下手ナル者有リ。然バ、理ノ中ニ事ヲ含ト、言ヒ難カラシ如何。

答 兵法ノ至理ハ、<sup>チノケキョウ</sup>知解計較ノ心ヲ以テ知ルベキ処ニ非ズ。<sup>ゴンゼツ</sup>言説談論ノ言アラハスニ、物無キ処也。然ルニ、分別ヲ以テ之ヲ知り、弁舌ヲ以テ之ヲ説クハ、兵法ノ至理ト天地懸隔也。兵法ノ事ノ下手ナル事、<sup>ムベナルカナ</sup>宜哉。

とあり、「世間には、兵法の理（道理）に詳しくとも、兵法の事（実践）は下手な者がいる。であれば、なぜ理の中に事を含むといえるのか」という問いに対して、「兵法の至理は、分別や弁舌をもって知り得るものではない。であるのに、分別や弁舌をもってこれを説くことは、兵法の至理とはかけ離れており、そのような者が兵法の下手であることは当然である」と答えている。

さらにつづけて、

問 汝ガ云所ノ至理ハ、悟道氏ニアラズンバ会シ難キ所也。吾等下愚、何ゾ至理ヲ会セン。修ノ様、有ヤ否。

答 我モ賢者ニアラズ。質鈍ニシテ、心痴也。然リトイエドモ、数年劔術ニ心ヲ尽シテ、始メ四五年ハ起ニモ居ニモ心ヲ劔術ニ染テ、少ノ間モ忘ザラン事ヲ思フ。其間ハ、何□忙数ニ至テ、一日ノ中ニ半

日、或ハ一時二時バカリ忘却スルコト多シ。七八年ノ後ニハ、一息ノ間モ忘レザル也。十四五年ノ後ニハ、已前兵法ヲ知ラザルトキノ如ニ成テ、常ニ忘ハテテ、兵法ニ臨ノ以前ニ、微塵ニモ当ルー機ヲ知処アリ。古人ノ云、鈍鉄ヲ百鍊シテ真金ト成ト。真実ニシテ忘ザル也。

とある。「汝の云う処の至理は、悟道した人でなければ経験できないところである。下愚の者がどうして至理を経験することができようか」という問いに対して、「自分も賢者ではなく、鈍であり痴である。しかし、多年剣術に心を尽くして、最初の4～5年は少しの間も剣術のことを忘れないよう心掛けた。その頃は、1日のうち、半日あるいは3～4時間忘却することがあった。そのうち7～8年後には、ほとんど忘却しなくなった。さらに14～15年後には、剣術を知らない頃のように、普段は剣術のことを忘れていても、剣術に臨む以前に、微塵（非常に微細なもの）をも感知するはたらきを知ることになった。古人の言うように、鈍鉄でも百鍊すれば真金とり、真実を識得して忘れないようになるのである」と答える。

ここにおける修行論は、禅における公案工夫の修行方法に通じるものがある。夢幻にとっては、剣術の「理」を四六時中片時も忘却せずに工夫・考究すること、そのものが公案工夫であり、そのことがまた、夢幻にとっての「事」(実践)なのである。

最後に、

問 汝ガ修スル如ク、一切時中兵法ヲ心ニ染ハ、世間多端之用事ヲ欠キ少シテ懈怠有ルニ至ランヤ。

答 心ト兵法トニツ也ト知故ニ、其迷有也。心ノ外ニ何ノ法有ンヤ。能々修シ得テ見ルベキ也。心源、元、無也。故ニ修行ト云ハ、常々是ノ心ヲ忘レザルヲ云也。是ノ心、元、無物也。此兵法、又、無物也。無物ヲ以テ無物ヲ修ス。終ニ、心ト兵法トトモニ、是、無物ナルヲ知ル也。

とある。「汝が修するように四六時中剣術に心をかけることは、日常世事の多端なおりには懈怠とならないだろうか」という問いかけに、「心（理）と兵法（事）は、二つに分けるものではなく、どちらも無物<sup>むぶつ</sup>である。したがって、無物もって、無物を修すれば、終には、心（理）も兵法（事）も無物であることを知る」といい、ふたたび事理一如を説いている。

『梅華集』の約四半世紀前に古藤田俊定（一刀流）によって著された『一刀斎先生剣法書』（1664）には、

事に功ありと云ども理を明に知らずんば勝利を得がたし。又、理を明に知たりと云ども、事に習熟の功なきもの、何を以てか勝つ事を得んや。  
事と理は車の両輪、鳥の両翅のごとし

とある。これとの比較で言えば、夢幻の事理論はこの『一刀斎先生剣法書』にみられるような「事＝技法、理＝理法」という相対的とらえかたではなく、「事（現象）と理（真理）は、もとより二分・対立するものではなく、互いに相即相融するもの」とする仏教的事理一如観を剣術にあてはめようとしたものといえよう。

近世剣術における事理論については、湯浅晃氏が、その発展過程を、①戦乱期における実戦経験にもとづいて、「所作」・「わざ」と「心」との有機的關係を具体的に表現した段階、②その具体的に把握されたものを抽象・概念化して事理論が萌芽した段階、③概念化された事理論が、実戦体験を離れた状況のもとで、いわば概念が一人歩きをして、より緻密で体系化された段階、④抽象・概念化されることによって見失われた「事理一致」という境位に至るために、「気」の概念や「呼吸法」を導入して、その過程論や方法論を呈示した段階、の4段階に分けている<sup>15)</sup>。

仏教的事理一如観をそのまま剣術の事理にあてはめようとする夢幻の事理論は、ある意味で「抽象・概念化した事理論」であり、「概念が一人歩きした事理論」ともいえよう。

(4) 天真・真空

「虚実分合」の章に、

未ダ敵ニ対セザル以前ニハ、虚実ナシ。敵已ニ我ニ向ント欲レバ、一氣ワズカ纔ニ天真ヲ破ル。一中略一。天真平等ニシテ彼我相ナシ。纔ニ来処アレバ天真ヲ失フ。人我無明勝負ノ修羅ハ、日夜天真ニ辜負シテ(背いて)、未ダ曾テ無明ヲ以テ無明ヲ撃ヲ知ラズ。終ニ是相撃也。天真ヲ以テ無明ヲ碎クハ、碓(砥石)ヲ以テ卵ニ投ルガ如シ。無明ヲ以テ天真ヲ破ルヲ欲スルハ、天ニ向テ唾ヲ吐クガ如シ。天真ハ亦是、自性ノ真空也。真空、境ニ随テ、物ニ応ズ。

とある。また、「真偽弁論」の章にも、

敵ニ対スル始メ、敵已ニ天真ヲ犯ス処、是自己ノ天討ヲ蒙ル也。我、彼ヲ撃ズト雖モ、已ニ自ラ薄ス。我、天ニ代テ不意ニ之ヲ撃ツ。是、兵法自然之至理也。

とある。

「天真」は、「作為をかりず、本来そのままであること」であり、敵にも我にも平等にあるものであるが、敵が我に向かおうとした時点で、その天真を失い、天真を犯すことになるという。敵も我も天真を失えば、それは「無明むみょう」(真実を失った無知、煩惱) 同士のたたかいとなり、相撃ちとなると説く。

また、天真はそれ自体「真空」(単なる空虚ではなく、真実の空。諸々の事物は縁起・因縁によって成り立っており、不変・固定的なものではないと観ずること) であるともいう。したがって、天真(=真空)とは、状況にしたがって諸事物に対応するものであるとする。

夢幻と同じく小出切一雲と交流のあった井鳥巨雲が創始した雲弘流の現当主・井上弘道氏(熊本市在住)は、同流第9代建部青一郎(青雲)が遺した「讀」(掛軸)を所蔵しておられるが、それには「(小出切)一雲師伝授」として、

空而不二頑空一、真空也。真空者、則天真也。天真之妙用、動則和静、和静而動。則物来不レ能レ破二自然一。得二必全一。

とある。

夢幻のいう「天真ハ亦是、自性ノ真空也」と、一雲伝とされる「真空者、則天真也」は、ともに天真と真空の関係を、一元的に捉えているものといえよう。

また、この天真(=真空)は、「境ニ随テ、物ニ応ズ」(夢幻)のものであり、「動則和静、和静而动」(一雲伝)というものである。かれらの用いる「天真」と「真空」の関係は、一元的であると同時に体用論(事物の本体とそこから生ずるはたらき)的とらえ方とみることができる。

前出大保木氏によれば、「武芸者にとっては、相手に及ぼす作用と、それを保証する自己の全身体(本体)の在り方が重要な課題」であり、武芸伝書にみられる体用論は、元来仏教や中国哲学における体用一元論的な事物認識を武芸家たちが援用したものであるという<sup>16)</sup>。夢幻や一雲の記述もこれに属するものといえよう。

## V おわりに

小出切一雲の跋文に「剣術の書たりといえども、聊かも勝負の枝葉を説かず、字々句々、唯天真之妙、大極之理、各々固より心性之論のみ也」とあるように、金子夢幻の『梅華集』には剣術の技法についての記述はほとんど無い。また一雲も『夕雲流剣術書』において、技法的なものはほとんど記述していない。なぜ、1600年代後半に、夢幻や一雲のように、徹底して技法論を廃する剣術心法論が登場してきたのであろうか。

このことは、『夕雲流剣術書』に、

近代八九十年此方、世上モ静謐トナリ干戈自ラ熄ミ、天下ノ武士共安閑ニ居睡リスルヤウニ成行テ、戦場ニ臨テ直ニ試ミ習フベキヤウナケレバ、セメテハ心知良友ニ相對シテ、互ノ了簡ヲ合セ、<sup>(ママ)</sup>勝理ノ多ク負ル理ノ少キ方ヲ詮議シテ勤習スル事、治世武士ノ嗜ミト成テ、木刀・シナヒ

(袋しない) ナドニテ互ノ了簡ヲ合セ試ル事、兵法ノ習ヒト成テ、隙アリノ浪人等朝夕工夫鍛錬シテ、所作ニカシコキ者ハ自ラ他ノ師トモナリテ教ヲ施ス。如<sub>レ</sub>此スル間ニ次第々々ニ兵法者<sup>(ママ)</sup>卓<sup>(ママ)</sup>卓<sup>(ママ)</sup>（沢山）ニナリテ、諸流区々ナリ

とあるように、泰平の世への移行期における世情や武士気質の変容、剣術修行の有り様の変化という状況があり、名利・実利を求め、「所作に賢い」兵法者・剣術家が多く出現したことに対するアンチテーゼとして、区々たる技法ではなく、心法を重視する剣術家・剣術論があらわれてきたものといえよう。

一雲は、『梅華集』をみて「年来之愁眉忽チ開キ、且ツ喜ブ」「主意殆符節ヲ合ス如シ。同気相求ル之故ヲ以テ、黙契心通更ニ山川ヲ隔ズ」（一雲跋文）と賞した。

一方、証明を求められた臨濟僧・雲巖全底は、「兵剣ハ予ノ知ル所ニアラズ」として、なぜ剣術に長じた者に問うて証明を求めないのかと尋ねた。夢幻は、「多年自分なりに工夫して剣術を手に熟し、心法に妙用を得たが、若し自分勝手に一流を伝えれば、それは正当ではなくなってしまう。師（雲巖）の説く心外無法の一句が、自分の剣術の至理に深く徹したので、師の許可を得てこれを後進に伝えたいと欲したからである」と答えた。雲巖もやむを得ず夢幻の「其得ル所、妙理日用ノ工夫」を詰問したが、夢幻がこれに答え得たので、「汝之談ズル所ノ剣術自然之妙用、元来心外ニ非ズ。真剣術ト謂フベシ」と証明したという（雲巖跋文）。

一面で『梅華集』は、「三箇の先」の章でみたように、「無ノ先・先ノ先・後ノ先」という「先」の概念にしても、一時代前の柳生や武蔵のとらえかたと比して、仏学的影響を受けた観念的・抽象的色合いの強いものであった。また、その事理論においても、他の剣術における事理論に比して、仏教的事理一如観を剣術の事理論として当てはめようとする、ある種、極論的なものであった。

さらに「先之先」の項の論旨展開にみたように、『実理学之捷徑』の援用とみられる部分があることや、また、「先之先」を「太極の先」とし、宋学的宇宙論においては「天地・陰陽が未だ分かれぬ以前の宇宙万物の元始」とされる「太極」を、「無之先=無名・無為の先」よりも下位に位置付けるとらえたなど、宋学的知識（陳北溪の『字義』など）をとりこみつつ<sup>17)</sup> 仏者の立場からこれを捉えなおした沢庵の影響がみてとれる。

前出源了圓氏や湯浅晃氏は、禅の見性に徹底した無住心剣術祖・針谷夕雲に比して、2代小出切一雲の著述においては儒学の影響がみられることを指摘している<sup>18)</sup>。1600年代後半という本格的泰平を迎えつつある世情や、宋学が政治的・社会的に強い影響力をもち始めた時勢にあって、一雲や夢幻の剣術心法論も直接的あるいは間接的にこれらの影響を受けているといえよう。

しかし、剣理が深淵・難解であるためか、あるいはあまりにも心法論に傾斜した流派であったためか、先述のように夢幻の伝系は6代で途絶え、後世には伝わらなかった。

夢幻が再評価されるのは、ずっと時代も下がった寛政期以降である。試合剣術（しない打ち剣術）の最先端をいていた中西派一刀流の門にありながら、これにあきたらず他に平常無敵流を修し、また白隠（臨濟宗中興の祖）の「練丹の法」をその弟子東嶺に学んで独自の流儀を確立した寺田五郎衛門（宗有）は、「小出切一雲の無住心剣の書共あり、亦、金子夢幻の法心流剣術の梅花集等校考<sup>(ママ)</sup>」し、また、その宗を継いだ白井亨も、「小出切一雲の遺書、山内蓮心八流斎（平常無敵流祖）の遺書、金子夢幻の遺書とも校考して観念したという（『天真伝白井流兵法遺方』<sup>19)</sup>）。

白隠の「練丹の法」という具体的方法を剣術修行の中核におき、「兵法に於て天真を養て純にする術」を伝えようとした寺田・白井にとって、『梅華集』も含めたこれらの「遺書」は、「各兵法に於て微妙を得て其の所得を述べたるは、天下人なきが如しと云へども、其書各練丹の事を論ぜず。此れ其人敏にして、暗に其妙を得し者なり。其書真理に通ずといへども、練丹の法

なくして階梯なきが故に空理にひとし」(前出『兵法未知志留辺・巻之上』)というものであり、これらの書の価値は十分に認めながらも、修行の過程論・方法論を示していないことにおいて不満の残るものであった。

しかしその一方で、1800年前後における試合剣術(しない打ち剣術)の流行を「是れ(剣術の)真理に違へり」(『兵法未知志留辺・巻之上』『天真伝白井流兵法遺方』)とみる寺田や、その薫陶を受けた白井にとって、1600年代後半において実戦性を失った「所作に賢い」剣術に対する警鐘として書き残された小出切一雲や金子夢幻の剣術心法論は、大いに共感をもって読むことのできる先哲の書であり、また十分に考察・研究の対象となりうるものであっただろう。

末尾ながら、本稿作成にあたり多大なるご教示をいただいた渡辺一郎先生(筑波大学名誉教授)、また資料収集にあたり懇切なご協力をいただいた上越市立高田図書館、村上市郷土資料館、岩船広域教育情報センター(村上市)、臨済宗安泰寺(村上市)の各位に対し深甚の感謝を申し上げる次第です。

#### 〈註〉

- 1) 渡辺一郎：兵法伝書形成についての一試論。近世芸道論(日本思想大系61)、岩波書店、1972、646頁。
- 2) 同前。647-648頁。
- 3) 同前。658-659頁。
- 4) 源了圓：剣法論に示された心・技・体のとらえ方と教育の型。源了圓：文化と人間形成(教育学大全集I)、第一法規、1982、95頁。
- 5) 柳生十兵衛三厳作、1637。今村嘉雄編：改訂史料柳生新陰流(下)、新人物往来社、1995、100頁。
- 6) 「無住流書」「無住心剣術書」「雲弘破想両流之伝」などの書名で、写本多数。筆者の知るかぎり、蓬左文庫蔵『無住流書・坤(無住流兵法之書)』(1697)が写本として最も古いものと思われる。
- 7) 山田次朗吉：日本剣道史、東京商科大学剣道部、1925、201頁。
- 8) 綿谷雪・山田忠史編：増補大改訂武芸流派大事典、東京コビイ出版部、1978、749頁。

- 9) 間島勲：全国諸藩剣豪人名事典，新人物往来社，1996，122頁。
- 10) 富永半次郎：剣道に於ける道，中央公論社，1944，108-110頁。
- 11) 東京都中野区役所編：中野区史下巻一，東京都中野区役所，1944，477-478頁。
- 12) 柳生十兵衛三厳：月之抄，1642。今村嘉雄編：改訂史料柳生新陰流（下），新人物往来社，1995，39頁。
- 13) 大保木輝雄：剣術の「理」に関する一考察—「病氣」を中心に—，武道学研究17-1，1985，106-107頁。
- 14) 柳生十兵衛三厳：拙聞集。今村嘉雄編：改訂史料柳生新陰流（下），新人物往来社，1995，82頁。
- 15) 湯浅晃：近世武芸伝書における事理論について。渡辺一郎教授退官記念会編：日本武道学研究，同会，1988，41頁。
- 16) 大保木輝雄：武芸における「氣」に関する諸問題—身体論的視座から—，武道学研究16-3，15-16頁。
- 17) 国書刊行会編：近世仏教集説，同会，1916，諸言。
- 18) 前掲書4)，94-95頁，および，前掲書15)，32頁。
- 19) 吉田奥之丞有恒：天真伝白井流兵法遺方，1846。筑波大学武道文化研究会編：剣術諸流心法論集上巻，同会，1988，8-9頁。

(ながお・すすむ 商学部助教授)